

## 日本で母語学ぶ場を 映画上映、監督と意見交換 神田 外語大 / 千葉

地域 | 千葉 | 映像・音楽 | 関東

毎日新聞 | 2024/12/29 地方版 | 有料記事 | 698文字



映画上映後に朴基浩監督（壇上の左から2人目）とトークセッションした学生たち＝千葉市美浜区で2024年12月19日、伊藤一郎撮影

日本に住む外国ルーツの人たちが「母語」を学ぶ機会の重要性を問いかける映画「はざまー母語のための場をさがしてー」の上映会が千葉市美浜区の神田外語大で開かれ、学生らが鑑賞して意見を交わした。

今回の映画は、定時制・通信制高校に通う生徒や外国にルーツを持つ子どもが抱える学習上の課題などに取り組み、タブー視されがちな「生理」にまつわるドキュメンタリー映画を手がけたこともある朴基浩（パクキホ）監督が制作。在日コリアンの朴監督自身がインタビューの一部やナレーションも手がけている。

映画は、朴監督が「母国」の韓国に行って自分が話す母語と現地の言葉との違いに違和感を持ったエピソードから始まる。日本で生まれ、暮らすネパール人の子どもが母から母語を教えられないながら母国にいる祖母と電話で話すシーンなどを通じ、日本では家庭以外に母語を学ぶ機会や場所がほとんどないという課題を取り上げる。

また、親の不安定な在留資格により、母語が話せないのに母国に帰らざるを得ない子どもや、母語が話せないために母国に行くことを嫌がる子どもも登場。今、多用される「多文化共生」という言葉が過去の差別の歴史を踏まえることなく安易に使われていないかという問題も提起する。

19日にあった上映後には朴監督と、外国にルーツを持つ4人の学生によるトークセッションを開催。学生らは「映画に出てくるシーンと同じ場面を経験したことがあり、共感できた」「父のルーツの国に行った時に、自分が話す母語が理解してもらえず、日本でも母国でも受け入れてもらえない気がした」などと話し、日本で母語を学ぶ機会を保障する法律の必要性などを議論した。【伊藤一郎】

※無断で複製・転載することを禁じます